

利用者の目から見た附属図書館

熊谷和則

「利用者の目から見た附属図書館」という題で、「情報学研究科の院生としての立場から」文章を書くように依頼を受け、引き受けてはみたものの、書く内容を練り始めてみると、テーマの難しさに頭をかかえてしまいました。

現在の情報通信の世界は変化が激しく、今書いた文章が、一週間後にはナンセンスなものになっている可能性はかなり高いと思います。さらに、「情報学研究科の院生としての立場」と言っても、情報処理、ネットワーク関連、図書館学にはうとい私には、学術的な裏付けのもとに図書館について書くことは不可能です。

そこで「ある一人の理系の大学院生としての立場」から、今までどのように附属図書館を利用してきたか、附属図書館に何を望むのか、を書きたいと思います。

学部生の頃の利用目的は、「これこれこういう本を読む為、あるいは借りる為」と、明確に定まっていました。理系の学問で、いずれは最先端のことを勉強、研究しようと考えていても、まずは基礎的なこと、昔から知られていることをしっかりと修得する必要があります。

自然科学系のテキストで内容が濃いものはあまり売れないためでしょうか、少し古いものだと、品切れ、絶版になっていて、書店では手に入らないことが度々です。その点、附属図書館には日本語のものならば、かなり読者が限られそうな（あまり利用者はいなさそうな）本でも、重要なテキストはそろっていて、大変助かっています。図書館の規模がそんなに大きくない大学に通っている友人の話の聞くと、我々は恵まれているのだなあ、とつくづく思います。

さて、大学院に入学し、日々の活動が、基礎的な「勉強」から、より専門的な「研究」へと推移するのに従い、調べる文献も、基本的な教科書、参考書から、学術雑誌や専門書（それも英文がほとんど）へと変わって行きました。

このような文献を探す時には、直接、図書館

の書架へ行ってみるのにはあまりにも非効率です。自然と、コンピューターを使うことになります。

インターネット上の検索サービスなどで書名や、雑誌ならば欲しい論文が掲載されている号数などを調べ、次にOPACで、京都大学内の所蔵館を調べるというのが一般的な手段でしょう。これらの手続きは、全て研究室のコンピューターから行なえます。また、私の専門分野に関する学術雑誌の類は、部局図書室が所蔵していることが多く、自分の研究に関わることで附属図書館へ足を運ぶことは院生になった今ではほとんどなくなってしまいました。（もっとも、院生でも文系の方々や、工学研究科の化学系の方々は研究のために附属図書館をよく利用されているようです。）

研究の手段として、附属図書館を利用することは減ったものの、未だに附属図書館にはよく行きます。それは、新聞、雑誌を利用する為と、研究以外のことで調べものをする為です。

現在、新聞や雑誌の論調を見ると、たいいていのことはインターネットで調べることができるようなことが多く書かれているように、僕には思えます。

しかし、いざ使ってみると、適切な検索を行う為には、自分にある程度の教養が必要であることを思い知らされます。

そして、これはあくまでも、私の個人的な意見ですが、「教養」を身に付けるには、現在のところでは、まだまだ旧来のメディアを利用した方が、得るものが多いと思います。

そこで、まだまだ図書館を利用することが重要であり続けているわけです。

今後図書館というものがいかに変わろうとも、「教養」を身に付ける道具の一つとしての機能は果たして欲しい、そう願っています。

（くまがい かずのり：大学院情報学研究科修士課程）